釜ケ崎 1986年越冬

協友会
通信9

釜ケ崎キリスト教協友会

ありがとう エルマナ・コラル

守護の天使の姉妹会

釜ケ崎の人々、特にお年寄りを心底から愛して生きたコラル。あの人なつっこい笑顔を私たちに残して一九八七年五月三日、天のお父のもとへ帰って行った。彼女のお姉さんと私たちの会の一人のシスターと一緒に祈りながら……。

第二バチカン公会議が、貧しい人々、弱い立場の人々に目を向けるよう呼びかけたことは彼女の心にひびき、釜ケ崎にその人々を見つけ、一九七四年、北津守のパリーミッション会のシスターの所に泊めいたゞいて釜ケ崎に関わり始めた。翌年、「何もできないけどせめて彼らと一緒に生きたい」と、山王に家を借りて、会のミニ共同体が始まった。

彼女は、愛情、活き活きした明るい笑顔、献身的な奉仕を、特にお年寄りに向け、ふるさとの家（以前はわかや食堂）で食堂などを手伝いながら、彼らと関わり、人間的・精神的すべての必要性に応えようと努力した。理髪を習って〝とこやさん〟もして喜ばれた。入院中のお年寄りをお見舞いし、慰めたり力づけたり、身のまわりの世話も親身になって最後までした。爪を切って上げたりする姿も板についていた。一人一人の写真を撮り、ふるさとの家の納骨堂に飾ったり、彼らの思い出を大事にしていた。

共に笑ったり、泣いたり、怒ったり人間味豊かな関わり方は、障害者の人々、英知大の学生さん達、スペイン語を教えた奥さん達、こどもの里の子供達にも同様であった。いつも人を喜ばせることに心を尽くし、入院中も、他の患者さん達を励まし、お医者さん、看護婦さん達とも友達になった。

コラルの思い出は尽きないが「私はスペインへ帰るけど、心はこちらに居るよ」と、彼女が特に心を残した弱い立場の人々の中で貫いた生き方は、私たちの会にとって、誇りであり同時に呼びかけであるように思える。

釜ケ崎のお年寄りと共に喜んで生きたコラルは、私たちの心に生き続けるに違いない。

エルマナ・コラル

略歴

一九三五年九月十日　スペインに生まれる
一九五二年　カトリック系守護の天使修道会入会
一九五五年十二月　誓願（初）
一九六一年六月　マドリード大学卒業
一九六一年九月二十四日　誓願（終）
一九六二年　カリフォニア
一九六七年一月　来日
一九七四年　釜ケ崎に入る、働き始める
一九七五年　共同体として（山王）
一九七六年四月　共同体つくる
一九八〇年四月二十九日　創立
一九八四年六月頃発病、手術を受ける
一九八七年五月三日　帰天

巻頭言

越冬が終わって、三月、四月と入院生活をおくった。

たった二カ月の短かい間であったが、退院して釜ケ崎に足をふみ入れたときに、今まであまり強く感じていなかった多くのことが、目にとび込んできた。

その一つは、白手帳で労働者を相手に、金融をする店がものすごくふえたことである。八〇年頃までは、ひかえめに、こそこそとやっていたのだが、私が退院をして、一番驚いたのは、釜ケ崎の目ぬき通りに立っている金融屋の存在である。「労災年金、労災休業補償、傷病手当金の相談に応じます」との内容の看板がかかげられている。大多数の労働者が、これを利用していると言われている。

日雇手帳が出来た当初は、アブレ手当も五百円で、平均賃金の四分の一程度であったために、利用する人も少なかったが、次第にアブレ手当も増加し、モチ代、ソーメン代などが加わって、手帳を持つ労働者の数は増加し、手帳のもつ意味もふえてきた。同時に、八〇年の冬頃から「金融」がはびこりだしたのである。

現在、手帳の番号は、七万六千台である。八四年十一月が、六万五千台であるから、アブレ手当が六千二百円になったことも考えあわせて、これからも急激にふえるものと思われる。

この制度は、労働者の生活保障として発足したにもかかわらず、「金融」の対象になっていることは、由々しき問題である。それを利用している労働者の問題としてすごされることではなくて、労働組合全体の問題であると思う。

「手配」「金融」「印紙」という言葉があるが、この言葉ほど釜ケ崎をよく現している言葉はないだろう。安く労働者を手配し、稼ぎを「つけ馬」をつけてとり、ヤミ印紙を使って、無資格者を有資格者にしたて、労働面、生活面を通して、釜ケ崎を支配しようとしている。

（金井愛明）

も・く・じ

追悼　ありがとうコラル……表紙裏

第17回釜ケ崎越冬闘争支援を終えて …… 2

協友会の越冬記録

●**はじめに**……6

●**週刊えっとう**No.1～No.7……8

釜ケ崎の状況（'87.1.15～3.9）

●子どもの夜まわり……36

里夜まわりだよりNo.1～No.10抜粋

子どもが変る大人が変る……36

学習会…37　子どもの声……39

九州の寄場に行った……44

福岡も山谷も大変だ……45

福岡と沖縄に労働組合が出来た……45

協友会通信7……46

協友会通信8……48

新聞切抜き……50

巻頭言……1

カンパ支援感謝……63

編集後記……64

表紙カット・創造広場

協友会　釜ケ崎

通信9　1986年越冬

第17回釜ケ崎越冬闘争支援を終えて

「おつちゃんはだんぼーるをあつめる」

一　こどもの夜廻り

三月十五日の越冬闘争総括集会で、第17回釜ケ崎越冬闘争支援活動も一応の終止符を打つことができました。今回も物心両面にわたって支援して下さいましたみなさまに心からのお礼を申し上げます。

越冬闘争活動が終わっても状況は一向によくならず、今もって釜ケ崎周辺で五百名近く、大阪全域では二千名近い労働者が野宿を強いられています。ヨーロッパや東南アジアからやってくる人々は一様に経済大国日本でなぜこのような状態が起こるのかと首をかしげて帰ります。

総括集会は問題を残したまま終わりましたが、本年度の集会は例年とは一味変わったものであり、未来に希望をつなぐ明るいものでありました。それは総括集会に参加した百人の半数以上がこどもたちであったからです。

大人の常識からすれば夜廻りはこどものすることではありません。ところが本年度はこどもの自発性を尊重し、一夜はこどもたち主役の夜廻りにしたのは、昨年十月に中高生が集団となって「四天王寺」の境内で野宿をしいられていた日雇い労働者をエア・ガンで撃ったり、石を投げたりしてケガをさせる事件が相次いで起こったからでした。

野宿せざるを得ない日雇い労働者を襲撃する事件は一九八三年横浜市内の山下公園で起こったものが有名でした。このときは少年たちは老日雇い労働者をなぶり殺しにしてしまったのです。その後各地で日雇い労働者に対する少年たちの襲撃事件は起こっていたのですが、余り新聞記事にはなりませんでした。新聞記事になっても教育問題や家庭問題にすりかえられて、被害者である日雇い労働者の立場から考えようとする人は多くはありませんでした。

誰も好んで野宿する人はいません。住む場所がないから仕方なくお寺の境内やビルの軒先、公園のベンチなどを借りているのです。その原因を更に追求するなら仕事がないからです。今の日本の経済構造が多くの失業者を産み出していることは今更説明を加える必要はないでしょう。特に弱い立場の人ほど切り捨てられていきます。仕事を追われた高齢者、病弱者、「障害者」は一体どこに行けばよいのでしょう。

こどもたちがこういった実体を自分の目で確かめ、又その弱い立場に追いやられている人々を自分たちの仲間である中高生が襲撃したことを体験するならば、こどもたちの力で問題にぶつかる勇気を養うことができるでしょう。

「こどもの夜廻り」は土曜日の夜、「こどもの里」を中心に、地域内で同じように学童保育に取組んでいる「山王子どもセンター」と「学童保育〝芽〟」がスクラムを組み、大人も参加して行われました。こどもたちは自分の手でおにぎりをにぎり、みそ汁をつくり、夜中に毛布と共に配り

ました。総括集会でこどもたちは自分の素直な感想をよみあげました。五歳の男の子は生まれて初めて作文を書きました。

おっちゃんとあくしゅした。おっちゃんは　よろこんだ。おっちゃんはわらっていた。おっちゃんが　かわいそうやった。おっちゃんは　だんぼーるをあつめる。おっちゃんに　おにぎりとみそしるあげた。おっちゃんにもーふかけた。

マイクをにぎりしめて、たどたどと読むこどもの声をききながら会場はシーンとなりました。野宿をよぎなくされている労働者に石を投げたり、火をつけたりするのも地域に住む少年たち。そして同じ地域に生まれ育ったこどもたちは同じ時におにぎりを配り、話しかけ、自分の目で野宿している労働者も同じ人間であることを確かめていきます。「ありがとう」の声をきいて、なぜこのおっちゃんが野宿をしなければならないのかといぶかります。

こどもたちが大きくなったとき苦しむ立場に追いやられている人々に対する見方は今の大人と異ってくるでしょう。夜廻りをしてこどもたちは大きく成長しました。

二　円高不況と釜ケ崎

日本国内で円高不況が声高に叫ばれ始めて数年になります。円は高く、経済大国日本といわれているのに国内ではその結果不況になるという仕組みは説明をきいてもよく解りません。しかし事実として日本国内では輸出を中心にしていた中小企業は軒並みに苦しみ、倒産が続いています。更にそれ以前から問題になっていた炭鉱、鉄鋼、船舶、それに本年四月から民営になった旧国鉄などの大手企業は、不況を口実に合理化につぐ合理化を実行し、多数の労働者を解雇し、多くの労働組合を骨抜きにしてしまいました。

今日本の完全失業者は百九十一万人以上（完全失業率三・二％）に達し、今年の夏までには二百万人を越すのではないかと予想されています。（一九八七年六月末の総務庁の発表）これは一九五三年政府が失業者の実態調査を始めて以来の最悪の状態であります。

今の日本の経済状態の波が日雇い労働者の街釜ケ崎にもろに押し寄せてきていることは云うまでもありません。

①　人口増加の波。この三年間、釜ケ崎に住む日雇い労働者の人数は増えつづけています。あいりん労働センターの調べでは、毎月五百人が増えています。（一九八七年五月の発表）流出する労働者も多いのですが、この三年間で一万人が増えたとみなされています。大阪にくれば関西国際新空港工事で仕事があるだろうと職を求めてやってくるのです。

②　技術化・合理化の波。土木・建築の面でも企業は合理化を目指し、機械技術を進歩させ、大型化し労働人口を少数に押さえようとしています。従って日雇い労働者に対する求人は増えていないのです。しかしマス・コミなどは釜ケ崎は景気がよくなっているというニュースを流したりしますから、釜ケ崎の労働者には仕事があるのだと思っている人は多いのです。従って仕事のない人を「怠け者」としてのレッテルをはろうとします。

③　病弱労働者、高齢者、「障害者」に対する波。最近はますます技術を持っている人、又は体力のある労働者が優先されるために、病弱労働者、高齢者、「障害者」に殆んど仕事がありません。特に入院していた日雇い労働者が退院するなら、彼らを雇ってくれる作業所は皆無といって過言ではありません。

④　宿泊費値上の波。関西国際新空港着工予定により、一部の労働者には仕事が増えることが見込まれ、一昨年か

ら釜ケ崎では簡易宿泊所の改築がブームとなりました。いわゆる木賃宿が壊されて、鉄筋、鉄骨のビジネス・ホテル化されたものとなり、宿泊費は最低でも千二百円、高いところでは二千円、平均が千五百円になってしまいました。従来は五百円から八百円で泊ることができたのです。宿泊費の値上りは日雇い労働者にとって深刻です。仕事がなければ野宿以外に方法はありません。まさに野宿を強いられるのです。冬の間に野宿を強いられるのは、「死ね」というのと同じです。

釜ケ崎キリスト教協友会はこういった事情からも行政に冬の対策を強く訴える必要を感じて、第17回釜ケ崎越冬闘争実行委員会に支援する他の四団体と共に昨年十一月二十四日に要望書を大阪市に提出いたしました。

一　越冬臨時宿泊所について

㋑　二〇〇〇人の臨泊を開設せよ。

㋺　臨泊受けつけ窓口をすべての区の福祉事務所に拡大し、その旨を周知徹底させること。

㋩　入所に関する一切の差別選別をするな。

㋥　自彊館パトロールによる差別選別前段「狩り込み」を廃止し、公に、前段入所を拡大せよ。

㋭　府労働行政と連携し、就労復帰が自力でできない労働者の就労を援助し、就労できるまで越年保護せよ。

二　恒常的な労働者宿泊施設を建設せよ。

三　公的療養、通院施設を新設すること。もしくは一時保護所機能を飛躍的に拡大せよ。

四　悪質精神病院への入院を中止し、悪質精神病院の解体、閉鎖をすすめる。（以下省略）

この要望書は、人が人として生きていくための当然のことなのです。当然の要望が毎年なされ、解決されないで状態が更に悪化しているのは残念なことです。

三　国際居住年と釜ケ崎

今年は「国際居住年」(International Year of Shelter for the Homeless)であります。日本も昨年（一九八六年）四月総理大臣を本部長に、建設大臣と国土庁長官を副本部長とする「国際居住年推進本部」が設置されました。そして九月には①国際協力および国際交流の推進　②日本の居住問題の改善の推進　③普及啓発活動の推進を柱とする「国際居住年事業の推進方針」を定め、事業を国民的運動として推進することにしたのでありました。

ところがこの International Year of Shelter for the Homeless の日本語訳は「国際居住年」であって大切な Homeless(家のない人々）を抜いており、事実、事業内容でも日本のホームレス（家のない人々）の問題には一言もふれていないのです。ＩＹＳＨの日本の推進本部は日本国内のホームレスの問題を無視しようとしているだけではなく、「浮浪者」と名付けてこれを排除しようとしているのです。

①　年末・年始の釜ケ崎

年末・年始は日雇い労働者に仕事はなくなり、帰る家もないために、釜ケ崎は日雇い労働者であふれ、野宿をよぎなくされる労働者は釜ケ崎付近だけで五百人を越すようになります。その対策を行政当局に要求したことは、先に記しました。大阪市はこの冬も大阪湾の埋立地に臨時宿泊所を設けましたが、千百名位が収容できる宿泊所でありながら、入所できたのは八百名でありました。希望者は、千五百三十八名です。

野宿した労働者

1986年		
12月	25日	159
	26日	260
	27日	270
	28日	411
	29日	401
	30日	429
	31日	410
1987年		
1月	1日	483
	2日	338
	3日	631
	4日	383
	5日	248

上の表でも明らかなように全く仕事がなくなる年末年始は野宿を強いられる労働者の数はピークに達します。

一月三日は六百三十一名でありましたが、JR大阪駅附近で三百名の労働者がこの現状を訴えたとき、無届デモとレッテルをはられて、十名が逮捕されました。行政は常に自分の責任を力によって転化しようといたします。

② 国際居住年と天王寺博と釜ケ崎

釜ケ崎の近くに天王寺駅があり、その近くに天王寺公園があります。大きな公園なので野宿を強いられる労働者には日々を過すのに適当な場所で、三百人位が生活していました。ところが関西国際新空港が着工されることとなり、附近の整備が急を要する課題となってきたのです。官民一体となって設立された大阪二十一世紀協会は、「天王寺博覧会」を本年八月一日から十一月八日まで天王寺公園で開催することを決めました。「天王寺博」の準備は昨年五月から始まりましたが、最初に追い出されたのは野宿を強いられていた労働者であります。「天王寺博」を主催するのは二十一世紀協会でありますが、その意向を汲んで市の公園局は労働者の住む場所も準備しないまま一方的に立ちのきを命令し、公園一帯を高いフェンスで囲んでしまったのです。

たちのきを要求された人々が、「四天王寺」の境内で夜を通していたとき、今度は中高生によって襲撃され、けがをさせられたことは先に記した通りです。

「ホームレス（家のない人々）」を対象にした「国際居住年」も半年が過ぎてしまいました。国際年の中でもこれほど人々に無関心にふされている年はないでしょう。多くの日本人は「家のない人々」とは発展途上国といわれている国々に多く、国内にあって問題になるのは、生活環境を整えていくことだと思っています。そして生活環境を整えるためにも邪魔になるものは除去するのが当たり前といいます。除去の対象になるのが、人権を持った人間であり、日本の経済成長に貢献した人々であり、それ以上に国際居住年に第一に考えねばならないホームレス（家のない人々）であるとは考えてもみないのです。

野宿を強いられている多くの労働者は「家族がなく」そして「住む家」もありません。だから人々は「浮浪者」と名付けて（家なき人々）からも除外してしまうのでしょうか。一人一人の人間の持つ人権の重さを、みんなが改めて反省し考えてみなければならないのが「国際居住年」です。

その昔、第5回内国勧業博覧会（一九〇三年）が天王寺公園を中心に行われ、明治天皇が見学するというので、長町に住む人々は追い出されて釜ケ崎に住むようになったのです。今再び、天王寺博覧会の名のもとにそこに野宿を強いられていた人々が追い出されているとき、私たちは「人を人として」と叫んでいるだけに、公けの行事のために労働者の人権が無視されてはいけないと力強く叫び、闘っていかねばならないでしょう。（薄田　昇）

協友会の越冬記録

- 週刊えっとう　No.1～No.7　35～8p（横書のため逆）
- 里夜まわり便り　No.1～No.10（抜粋）36～43p

一　一月十日まで

毎年釜ケ崎の越冬闘争は十二月一日より現実の取り組みに入ります。先づ釜ケ崎地域合同労組が中心になって、それまで年中無休、一日二回行われていた炊き出しが一日三回に増やされるのです。一日十キロ程のお米を雑炊にして五百人から八百人、多いときには千人で分け合うのですから、一人の口に入る量は僅かです。でもこの雑炊を待って長い行列ができるのです。このお米は全部善意の人々によって集められたものです。

十二月二十五日からは釜ケ崎越冬闘争実行委員会が中心となり、キリスト教協友会を初め多くの支援団体と共に生きるための闘いが展開されていきます。医療センターの玄関先に蒲団を敷き野宿を強いられている労働者の宿となし、年末年始には三角公園で一晩中火を燃やして夜を過し、また夜廻りをします。翌朝は医療相談を受け、入院の必要な労働者は病院に入れるように配慮します。文字通り、〃一人も凍死者を出すな。生きて春を迎えよう〃と互いに励ましあいながら闘うのです。越冬闘争ということばの重味がビンビンと響いてきます。

新しい年を迎え一月も十日を過ぎると、釜ケ崎越冬闘争実行委員会の労働者は労働問題で忙しくなります。そこで釜ケ崎キリスト教協友会はバトンタッチして三月の半ばまで夜廻りを中心にした越冬活動に入っていくのです。一月も半ば過ぎますと寒さは一段と厳しくなってきますので、本当は今まで同様に、外であっても毎晩蒲団を敷きたいのですが、人手不足と力量不足でそこまではできません。

釜ケ崎キリスト教協友会は十一月に入ると直ぐに越冬小委員会を結成してやがてくる冬にどう対処すればよいかと準備に掛ります。一番頭を悩ますのが、例年毎晩夜廻りをしているが、果たしてそれで解決になるのだろうか。もっと大切なのは夜廻りしたあとのアフター・ケアー、つまりそこで寝ている病人を病院に入れるようにしたり、生活相談に応じたりすることではないかとの問題点でした。

二　一冬四拠点制

従来、釜ケ崎キリスト教協友会は、釜ケ崎越冬闘争実行委員会の後を受けて、一冬一拠点制を実行してきました。つまり越冬期間中喜望の家とか旅路の里を拠点として毎晩の夜廻りを実行してきたのです。しかし回を重ねるに従ってこの一冬一拠点制に対しても反省がでてきました。二ヵ月近い期間を毎晩夜廻りしようとすると沢山の人々の参加が要求されます。奉仕の面からすればよいことなのですが、初めての人も参加して多勢で街頭を廻るなら、野宿を強いられている労働者にとって迷惑になることも屢々です。

また釜ケ崎にはドヤ（簡易宿泊所）が密集していますから、朝早く起きて仕事に行こうとしている労働者にとって毎晩おそくまで多

’86〜’87年
釜ヶ崎キリスト教

勢の人が集まってくることは安眠のさまたげになるのです。事実この点に関して拠点となった施設は屢々近所からの抗議を受けなければなりませんでした。

越冬小委員会はこれまでの反省から一冬一拠点を続けることは無理だと判断しました。もし一冬一拠点を貫こうとするなら、一週間一回だけの夜廻りしかできなくなるでしょう。釜ケ崎キリスト教協友会ではこの越冬小委員会の意見を受けて、各施設と相談し、この冬は一冬四拠点制をとり、夜廻りは一週四回とし、その代りにアフター・ケアーを大事にすることにしました。また四拠点は従来の方法に捕われず各自自分の持味を発揮していくことになりました。四拠点とは次の通りです。

月曜日…ふるさとの家　火曜日…旅路の里
金曜日…喜望の家　土曜日…こどもの里
三〃週刊えっとう〃と
〃里の夜まわりだより〃

四拠点制となり、各拠点がそれぞれの特徴を活かし、アフター・ケアーを大切にすることにしましたが、グループで学習会を開いたのも今年の越冬の特徴となりました。

昨年までも出発前にはオリエンテーションがあり、夜廻りが終われば反省会があったのですが、毎晩同じことを繰返しては解散する面がありました。同じことの繰返しでは参加者はどうしても夜廻りの行動だけを重視して、たゞ来て、たゞ廻って、たゞ帰るということになってしまうのです。

今年はもっと釜ケ崎問題に肉薄するように各拠点は配慮しました。学習会を行うところは、学習会に参加することが夜廻りに参加する大切な条件といたしました。各々の学習会の報告をよみますと、教えられる点も多くありますので、今年の協友会の越冬報告書は毎週一回だされた〃週刊えっとう〃を全部載せることにいたしました。どうぞ最後まで目を通していたゞきたいと思います。若さにあふれる文面から、釜ケ崎問題がなぜ起こるのか、その解決のためにみんなで何をしなければならないのかといった情熱のほとばしりを感じとることができるでしょう。

土曜日の夜の拠点となった〃こどもの里〃は、地域で学童の問題を共に取組んでいる〃山王こどもセンター〃〃学童保育「芽」〃といっしょになり、こどもたちの自発性を活かしたこどもの夜廻りとなりました。その記録里夜まわりだよりも全文載せたいと思いましたが、頁数の関係で割愛せざるを得ませんでした。更にこどもの字をそのまま載せたいと思いましたが、大人の勝手な配慮で活字にしてしまいました。小学一年生のこどもが初めて夜廻りに参加して家に帰ってねることのできなかった体験を、ご自分の体験として読みとって下さい。

未来を背負う若い人々は真剣です。今年の報告書にその息吹を汲み取っていたゞけるなら幸いです。